

令和 2 年 6 月 21 日現在

機関番号：32611

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2017～2019

課題番号：17K02288

研究課題名(和文) 作曲家・ピアニストの自作品の演奏における楽譜との相違に関する総合的研究

研究課題名(英文) General Study on Differences in Own Works with the Scores in the Performances of a Composers/Pianists

研究代表者

加藤 一郎 (KATO, Ichiro)

国立音楽大学・音楽学部・教授

研究者番号：60224490

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,500,000円

研究成果の概要(和文)：作曲家・ピアニストによる自作品の演奏は、彼らが書いた楽譜としばしば異なることがある。本研究はバロックから近代までの音楽家を研究対象とし、彼らの自作品の演奏と楽譜との相違を分析することによって、各々の作曲家・ピアニストの音楽的特性、様式的変遷等をより一層明瞭にすることができた。そして、それらを基に、創作行為と演奏行為の質的な違いについて考察を深め、有益な結論を得ることが出来た。

研究成果の学術的意義や社会的意義

作曲家・ピアニストの自作品の演奏における楽譜との相違を学術的に分析した研究はこれまで殆ど行われてこなかった。作曲家・ピアニストの自作品の演奏は自ら書いた楽譜としばしば大きく異なっており、そこから彼らの芸術的特性、様式的変遷がより鮮明に明らかになった。そして、創作行為と演奏行為の質的な違いについても有益な結論を得ることができた。本研究は、今後の音楽研究及び音楽実践に新たな示唆を与えるものと考えられる。

研究成果の概要(英文)：Musical performances by classical composers/pianists often differed from the original scores they composed. In this study, we selected musicians from the baroque to modern periods and by analyzing variations in their performances from the original scores each musician's artistic character or stylistic transition became clear still more. And based on them we deepened consideration about the qualitative differences between their creative activities and musical performances, and was able to get a beneficial conclusion.

研究分野：美学・芸術諸学

キーワード：作曲家・ピアニスト 自作自演 楽譜との相違 作品と演奏の本質 創造的演奏 感性とパーソナリティー 芸術的アイデンティティ 楽譜の本質的役割

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

1. 研究開始当初の背景

近年、演奏の場では原典版楽譜が盛んに用いられるようになった。これは演奏家が作曲家の意図をより厳密に尊重するようになったことを示している。しかし、当の作曲家自身は自らの作品を常に楽譜通りには演奏していなかった。演奏と楽譜との相違はしばしば音楽の本質に関わる問題を含んでいるにも関わらず、これまで十分に研究されてこなかった。本研究はそこに着目したものである。

2. 研究の目的

作曲家・ピアニストによる自作品の演奏と楽譜との相違から個々の音楽家の芸術的特性、様式的変遷等をより一層明らかにすると共に、創作行為と演奏行為の質的な違いについて考察を深める。

3. 研究の方法

(1) バッハ及びショパンについては、彼らの即興的な音楽様式及び楽器との関わりから本研究課題にアプローチした。また、ショパンについては、更に、彼が生徒にレッスンをした際に生徒の楽譜に行った書き込みを主な資料とし、彼が求めた演奏解釈と楽譜との相違を分析する方法を用いた。

(2) 自作品の演奏録音が残存する作曲家・ピアニストについては、その演奏録音を用い、音楽構造、テンポ、リズム、強弱、アーティキュレーション等の観点から演奏と楽譜との相違を分析する方法を用いた。

4. 研究成果

本研究は、研究協力者(久行敏行、森垣桂一、林達也)と共に行われ、最終年度に研究成果報告書として図書『作曲家・ピアニストによる自作品の演奏と楽譜の相違に関する総合的研究』を発行した。本項目にはその内容を記す。

(1) 「バルトークの自作自演について 独奏曲とアンサンブル曲における楽譜と演奏の相違に関する研究」

本研究ではバルトーク・ペーラの自作自演について、譜面に忠実な演奏か、もし差異があるとするならばどのような内容であるかについて分析を行うものである。テンポは作曲してから時間が経過しても指定通りであるのか、また強弱や表情に関しても変化を示すものであるのか、興味が尽きないと考えたこと、また、彼がアンサンブルの演奏者である場合に共演者の主張をどう受け止め、どこまでスコアに対し忠実さを求めるのか、共演者の個性を尊重するものなのか、についても興味ある調査対象であると考えたのが当研究に至った理由である。調査の対象は《子供のために vol.1》の中から録音が残されている15曲、アンサンブル曲は《ヴァイオリンとピアノのためのラプソディ第1番》の2曲である。

《子供のために》については、平易な書法で書かれたもの(初版)と、改訂し、より弾きやすいものにした版(1945年版)以外に、バルトークが独奏するときには技術的に初心者向きでない内容に変更しているのを多数観察できた。自分の書いた譜面に呈して実に融通

無碍なスタンスである。一例を示す。

Allegretto より

初版：第 9～11 小節



1945 年版：第 16～19 小節



バルトークの録音：第 16～19 小節



それに対し、《ヴァイオリンとピアノのためのラプソディ第 1 番》ではテンポの遅い場面では共演者のシゲッティが即興的な変奏をしたり、リズムに多少の変更をしているが、バルトークは柔軟な姿勢を見せている。バルトーク自身が楽譜に対して何かしらの変更をすることはなく、また、テンポの速い部分では二人とも楽譜に忠実な姿勢を見せている。

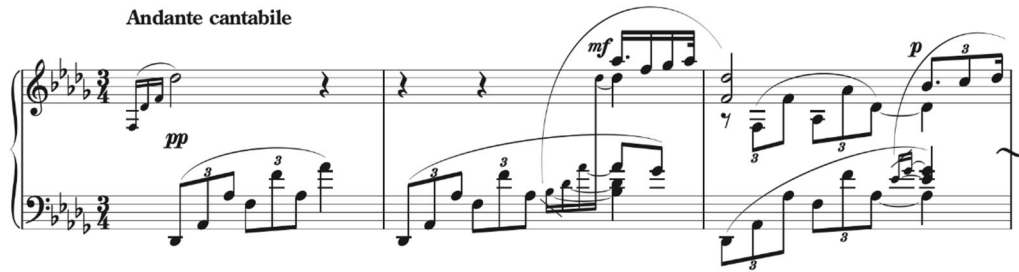
以上、2 作品の演奏を分析した結果、バルトークの自作自演に対するスタンスは状況に寄ってかなり幅広いものであることが見えてきた。今後更に他のジャンルでのバルトークの自作自演についての調査を今後の課題とする予定である。 (久行敏彦)

(2) 「作曲家自作自演の録音と出版楽譜についての考察 ラフマニノフの歴史的演奏録音の分析を通して」

本研究は、出版された楽譜と作曲者の自作自演との間の相違はどのようなものか、またそれはどのような理由で起こるのかについてロシアの作曲家 = ピアニスト セルゲイ・ラフマニノフの自作自演の歴史的演奏録音を分析することにより、検証を行った。彼は一人の演奏家として、自作の楽譜に客観的な姿勢で取り組み演奏を仕上げている。

第一に、今日とは異なる美学と演奏習慣の名残によって、楽譜に書かれていない演奏が行われていることが分かった。ラフマニノフは、伝統的な「テンポのリレーション」「テンポの変化」「テンポ・ルバート」「ずらし」「アルペッジョ」楽譜と異なる「強弱法」等を用いた。そして、楽譜をそのまま演奏するのではなく、解釈の多様性を発起して、その時々での様々な演奏表現を録音に残している。

《パガニーニの主題による狂詩曲》Op.43より〈第18変奏〉変ニ長調 第1～3小節



ラフマニノフの演奏録音(1934年)による

第二にラフマニノフは、作曲者ならではの自作の完全な理解から生まれる、演奏への構造的なアプローチを行っていた。すべての演奏でクライマックスを中心とした曲の構造と性格のコントラストをダイナミックに強調するため、楽譜には書ききれなかったであろう様々な工夫が演奏に現れていて、録音で確かめることができる。

楽譜の限界を一番良く理解しているのは作曲者自身であろう。そしてラフマニノフの自作自演の録音は、作曲家が楽譜に書ききれなかったことを演奏で示している第一級の史料と言えるだろう。またこのことは、現代のピアニストの第一の美德である「楽譜に忠実」な演奏が、過剰に行われることへの警鐘となると思われる。(森垣桂一)

(3)「大作曲家の楽譜と自作自演録音との相互比較における演奏様式の解釈 フォーレ、ドビュッシー、スクリャーピン、ラヴェルから現代へのメッセージ」

大作曲家の自作自演の分析結果により、作曲家が作品を、楽譜という媒体で書き表わした表現と、実際の演奏で、音の表現として記録に残された録音媒体では、かなり大きな相違として認識される事実が本研究によって、明らかになった。

また、作曲家の生まれ育った国籍や、作曲家自身の性格、固有な音楽性を追求し、作曲家として国際的な地位を確保した時期の演奏録音など、多角的な視点からの考察結果からも伺えるように、その年代の音楽活動により、表現の質に変化が現れるということも判明した。また、作曲と演奏では、最終的な表現の現実化に至るプロセスが全く逆方向であり、その経緯の相違により、作曲家と演奏家との作品理解のあり方に深い溝と命題が隠されているということが、明らかになった。

更に、作曲家の生まれと音楽院での教育課程、また、音楽家として活動した国と場所においても、その演奏の特質に大きな差異が見られることが明らかになり、作曲家独自の固有な演奏音楽表現にも、生まれ育った少年期だけではなく、生涯、活動した場所や、性格、気質、身体的特質、その背後に見られる人間関係や地理的条件など、作曲家を取り巻く様々な環境、育ち、生まれ、遺伝的気質によっても、作曲家の出版楽譜と作曲家自身の演奏表現の質と相違、違いがあるということが、作曲家の表現の特質、及び特徴を分析比較することによって、更に明白になった。

これらの研究成果により、大作曲家の生み出した作品を享受する側として、どのように向き合い、理解をしていくことが必要なのかという、ひとつの指針が示されることができたのではないと思われる。(林 達也)

(4)「生徒の楽譜への書き込みに見るショパンの音楽的思考 カミーユ・デュボワ=オ

メアラの楽譜を通して」

フリデリク・フランチシェク・ショパン(1810~1849)は創作活動と共に教育活動も熱心に行っており、彼はレッスンの際に生徒の楽譜に多くの書き込みを行っていた。本研究ではショパンの晩年の最も優れた生徒の一人であったカミーユ・デュボワ=オメアラが、ショパンのレッスンの際に用いていた彼の作品による楽譜への書き込みを分析することによって、ショパンが求めた演奏解釈と楽譜との相違について考察した。

ショパンは《マズルカ》イ短調作品 7-2 や《夜想曲》変ホ長調作品 9-2 等に装飾や変奏を書き込んでおり、それらは、彼の音楽の基本的性格である即興性及び多様性を示している。

また、1836 年頃に書かれた《ワルツ》イ短調作品 34-2 の第 8 小節にはソプラノ声部が新たに付加されており、この書き込みは、彼の晩年の主要な生徒の楽譜に共通して見られることから、この書き込みが彼の最終的な意図と見なされるようになった。また、1835 頃に書かれた《夜想曲》変二長調作品 27-2 では、テーマが 2 回目に現れる第 26 小節で p を pp に修正し、テーマが 3 回目に現れる第 46 小節に ff が書き込まれている。これは、ショパンがコードに繋がる曲の後半部分に大きな山を作ろうとしたものである。これらの書き込みは、創作時から時間を経て、ショパンが推敲を重ねた結果と考えられる。

更に、前述の《ワルツ》イ短調作品 34-2 の第 122~136 小節には模倣対位法的な対旋律が書き込まれている。ショパンはレッスンの際に、生徒が奏するよりも上の音域で、即興的な添え弾きを行うことがあり、この書き込みはそうした添え弾きをデュボワが書きとったものと考えられる。模倣対位法はショパンの後期様式の特徴であり、これはショパンの様式の変遷を示すものと言える。

ショパンの書き込みは、即興性や演奏解釈の多様性といった彼の音楽の基本的性格を示していた。そして、曲の創作時から時間が経過する中で、彼は作品の推敲を行い、生徒の楽譜に書き込んでいたことも分かった。また、模倣対位法的な書き込みは、デュボワがショパンに師事した後期の様式を示すものと考えられる。(加藤一郎)

演奏の基本的性格として、演奏行為は実演芸術である為に、常に同じ演奏を行うことは出来ない。また、創作行為は作曲家が自己の音楽的アイデアを最終的に一つの楽譜に帰結しようとするものであるのに対し、演奏行為は演奏家が楽譜から読み取った音楽情報を実際の音にするものであることから、この二つの音楽的行為は楽譜という媒体を介して逆の方向を辿るものとも考えることもできる。演奏家は自分なりの方法で楽譜を解釈することになり、それは常に一定であるとは限らない。更に、演奏家が即興的な性格をより強く持っている場合は、演奏は常に多様な解釈で行われるであろう。今回の研究によって、作曲家と演奏家が同一人物でも楽譜と演奏との相違が起こる経緯が明らかになった。

また、作曲時からの時間的経過に伴って作品に推敲が加えられたり、彼らの様式の変遷等が演奏解釈に現れることも分かった。これは文学や美術のように作品のみで完結する芸術領域とは異なり、演劇やバレエ、朗読といった実演芸術に共通した問題であろう。

<引用文献>

Kreuzsz, Michael. *The Interpretation of Music: Philosophical Essays*. Clarendon press oxford (1993)

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計5件（うち査読付論文 3件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 Ichiro Kato, Yo Tomita	4. 巻 30
2. 論文標題 Chopin's Canons: Technical Development, Chromaticism and Their Relationship with the Aesthetics of His Late Style	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 国立音楽大学大学院研究年報『音楽研究』	6. 最初と最後の頁 1-15
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） ISSN 0289-4807	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 加藤一郎	4. 巻 31
2. 論文標題 ピリオド楽器によるショパンの演奏解釈に関する研究 NIFC制作 “The Complete Works of Fryderyk Chopin on Historical Instruments” の演奏録音の分析を通して	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 音楽研究：国立音楽大学大学院研究年報	6. 最初と最後の頁 1-17
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 加藤一郎	4. 巻 53
2. 論文標題 「第1回ショパン国際ピリオド楽器コンクール」の芸術的・社会的意義に関する研究 演奏解釈と楽器及び楽譜の関連を通して	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 国立音楽大学紀要	6. 最初と最後の頁 91-102
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 加藤一郎	4. 巻 32
2. 論文標題 カミーユ・デュボワ＝オメアラの楽譜の書き込みに関する序論的研究 フランス国立図書館所蔵資料のアーカイヴ調査による	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 国立音楽大学大学院研究年報	6. 最初と最後の頁 1-17
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 加藤一郎	4. 巻 54
2. 論文標題 バッハの ドゥーブル その様式的特徴	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 国立音楽大学研究紀要	6. 最初と最後の頁 23-34
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計2件 (うち招待講演 2件 / うち国際学会 1件)

1. 発表者名 加藤一郎
2. 発表標題 ショパンのカノン：その特徴と表現方法
3. 学会等名 公益財団法人日本ピアノ教育連盟 (招待講演)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 Ichiro KATO
2. 発表標題 What Is the Music that Chopin Really Sought? By the Analysis of his Autographs and the Notes to the Scores of his Students
3. 学会等名 The 2019 ASIA International Piano Academy & Festival in Korea (The Piano Society of Korea) (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 加藤一郎、森垣桂一、林達也、久行敏彦	4. 発行年 2020年
2. 出版社 ヒルトップ出版	5. 総ページ数 127
3. 書名 作曲家・ピアニストによる自作品の演奏と楽譜との相違に関する総合的研究	

〔産業財産権〕

〔その他〕

<http://www.pianosocietykorea.com/content/2019-asia-international-piano-academy-festival-korea>

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	森垣 桂一 (MORIGAKI Keiichi)	国立音楽大学・音楽学部・特任教授 (32611)	
研究協力者	林 達也 (HAYASHI Tatsuya)	東京藝術大学・音楽学部・准教授 (12606)	
研究協力者	久行 敏彦 (HISAYUKI Toshihiko)	洗足学園音楽大学・音楽学部・教授 (32709)	